

自然豊かな環境で主体的に学んだ子どもたちの発達への影響

— よみたん自然学校の卒業生調査から —

小倉宏樹（認定NPO法人よみたん自然学校／日本女子大学学術研究員）朝倉香也代（日本女子大学大学院生）

中里啓子（風の丘めぐみ保育園）永島さくら（江戸川学園おおたかの森専門学校／日本女子大学学術研究員）請川滋大（日本女子大学）

【研究目的】 幼児期から小学校段階まで自然豊かな環境で主体的に学んだ子どもたちの発達への影響を明らかにする

【研究の背景】 ・森のようちえんの調査研究が増え、追跡調査が行われるようになってきた
・森のようちえん団体が森のようちえん型オルタナティブスクールの取り組みを行うようになり、その数が増えてきた
・森のようちえん型オルタナティブスクールの追跡調査はまだない
・全国調査との比較で一定の傾向を示すことができる

【比較データ】 内閣府「子供・若者の意識に関する調査」（令和元年度）

【追跡調査の先行研究】 下村一彦他2025「大学生世代となった‘こどもの森幼稚園’（森のようちえん）卒園児の非認知的特質の傾向」
『東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要』第15号、pp.1-14

【調査の概要】

○調査対象
よみたん自然学校の「幼児の学校」及び「小学部」に在籍したことがあり、2024年度に13歳～23歳になる207人のうち連絡先が分かる61人

○調査期間
2024年3月～6月

○回答数と属性
回答数34人（回収率55.7%）
性別 男性18人（52.9%）、女性15人（44.1%）
回答しない1人（2.9%）
年齢 13歳4人（11.8%）、14歳5人（14.7%）
15歳3人（8.8%）、17歳9人（26.4%）
18歳3人（8.8%）、19歳1人（2.9%）
20歳6人（17.6%）、21歳1人（2.9%）
22歳1人（2.9%）、23歳1人（2.9%）

【倫理的配慮】

本調査は、対象者に対して調査の目的および内容を説明し、同意を得た上で実施した。回答は統計的に処理し、個人が特定されることのないよう匿名性に配慮した。また、収集したデータは、本研究および今後発行予定の書籍への掲載以外には使用せず、研究目的以外での利用は一切行わない。

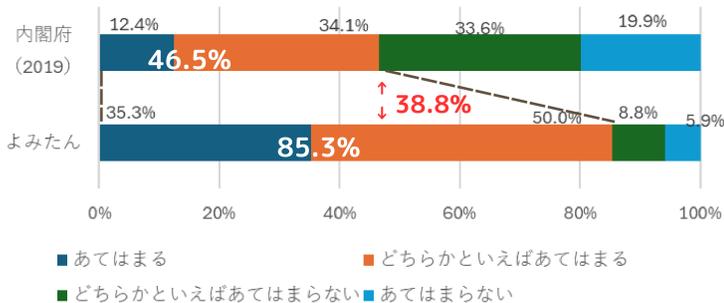
【調査対象の概要】

2007年4月～3年保育「幼児の学校」（森のようちえん活動）
2010年4月～フリースクール「小学部」（オルタナティブスクール活動）
いずれも平日昼間に行われる日常型の活動
<特徴>
1日の活動を子どもたち自身で決定する
基本的に、スタッフは子どもたちのやりたい事を実現するためのサポート役として関わる

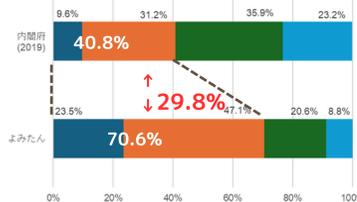


【結果】

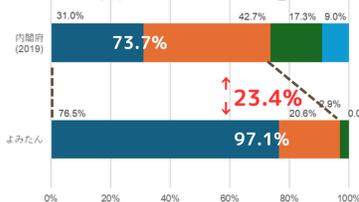
I. 今の自分が好きだ



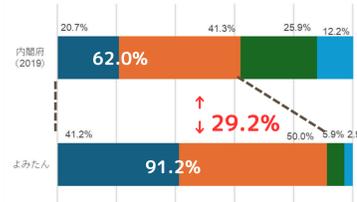
N. いまの自分自身に満足している



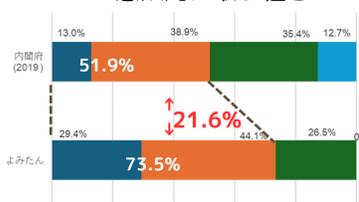
K. 自分の親（保護者）から愛されていると思う



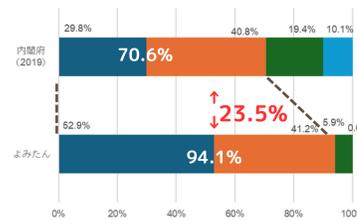
E. 努力すれば、将来希望する職業に就くことができる



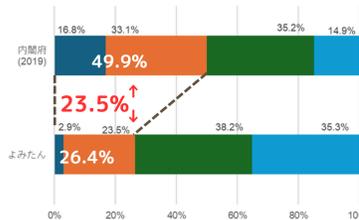
L. うまくいかかわからないことにも意欲的に取り組む



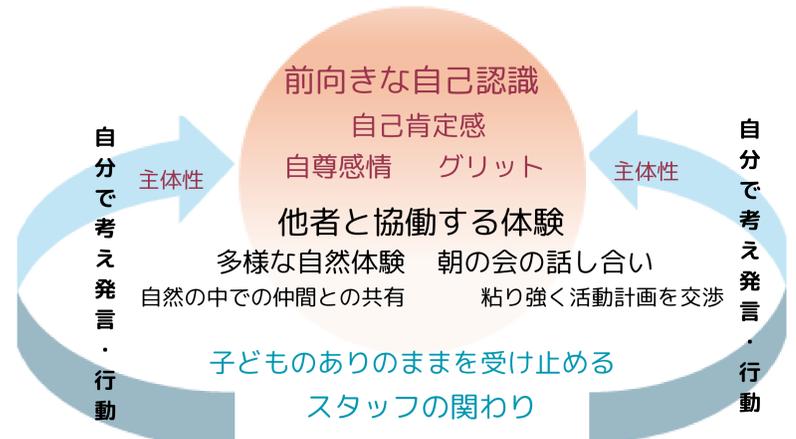
A. 自分には自分らしさというものがある



O. 自分は役に立たないと強く感じる



* その他の調査項目は配布資料参照



【考察】

本研究では、自己診断に関する15項目の回答結果より、よみたん自然学校の卒園児・卒業生の自己認識の傾向を分析した。

--主な調査結果--

○内閣府との比較で最も大きな差

「今の自分が好きだ」

○内閣府より20～30ポイント高い項目

「いまの自分自身に満足している」「努力すれば、将来希望する職業に就くことができる」「自分には自分らしさというものがある」「自分の親（保護者）から愛されていると思う」「うまくいかかわからないことにも意欲的に取り組む」

○「自分は役に立たないと強く感じる」では内閣府より低く、肯定的評価

⇒これらの結果から、よみたん自然学校の卒園児・卒業生たちは自己肯定感が高く、前向きな自己認識を持っていることがうかがえる。

--背景要因--

* 多様な自然体験

自然の中での遊びや活動、仲間との共有体験が自尊感情を高めているのではないかと。

* 朝の会での話し合い

毎日の活動計画を子ども同士で話し合い、交渉する経験が、主体性やグリット（やり抜く力）の育成、前向きな展望を持つことに寄与している可能性。

* スタッフの関わり方

子どものありのままを受け止め、自分で考え発言・行動できるような自己肯定感を育む関係性を築き深めているようだ。

⇒以上より、多様な自然体験、毎日の活動計画を子ども同士で話し合う等の他者と協働する経験、そして子どものありのままを受け止め自己肯定感を育むような大人の関わりが子どもたちの高い自己認識を支えていると考えられる。

【全体考察】 今回の結果は、①回収数が少なかったこと、②対象者に卒業して間もない13歳以降の中・高生が含まれていることがあった。本調査の対象者数が限られることから、今後は調査対象者の拡大や年齢層の考慮、そして卒業生への聞き取りなど質的調査等を行う必要がある。また、自尊感情やグリットの高まりには、よみたん自然学校での経験だけでなく、他の要因が影響を与えていることも考えられる。本校での経験は、それらを構成する一つの要因に過ぎないだろう。しかし、一般的な保育施設や小学校とは異なる経験を多くしているのも事実なので、その経験と彼らの現在の自己認識がどう関連しているか、今後も検討していきたい。